

#子育て処方せん

人工心肺で安全性向上

福岡市立こども病院の医師が、専門とする病気やその治療法を解説する「#子育て処方せん」。今回は、生まれつき心臓に疾患がある新生児や乳児らへの外科手術を担当する心臓血管外科長の中野俊秀医師に、手術が必要になる疾患の種類や最新の手術法などを聞いた。

心臓の外科手術

心臓の外科手術が必要になる子どもの病気は、ほとんどが先天性の心臓病で、▽左右の心房・心室の大きさのバランスが取れていない▽それぞれの部屋を仕切る隔壁に穴があいている▽心臓と血管のつながる部分に異常がある――などがある。その結果、心臓に負担がかかったり、全身に十分な血液が送られなかったりする。

手術をする必要がある。体力が弱く、感染症のリスクも高いため、担当医は時間をかけず的確に執刀するスキルを磨いている。



中野俊秀医師

手術に使う設備も進歩している。当院には、通常は別々に実施するカテーテルを使った治療と開胸手術を同時に行える「ハイブリッド手術室」を備えている。低体重児の手術に使える小型の人工心肺装置もある。当院ではこの装置を使

血液循環止めず 後遺症も減

い、血液の循環を止めずに手術を行う新しい体外循環法を開発した。従来の手法より臓器に後遺症が残りにくく、安全性が大きく向上した。

術後も定期的な経過観察が必要なことはあるが、小学生になって真っ黒に日焼けするくらい外で遊び、水泳も持久走もしている手術経験者もたくさんいる。胎児や幼い子どもにも心臓の手術が必要な疾患が見つかり、家族に伝える際には、こつしたことを含めて情報をできるだけ詳しく、丁寧に開示し、安心してもらうようにしている。

(聞き手・大森祐輔)

疾患の種類や症状によって手術をする時期は様々で、学童期まで待つて手術をするケースもある一方、生後1か月以内に手術を行わないと命に関わる場合もある。近年は心エコー検査などで、おなかにいる胎児の段階から異常が見つかる例が多い。産科と連携し、分娩室での出産後すぐに隣の部屋で心臓手術を行うことも年に数件ある。

新生児や乳児の心臓は成人より小さく、拡大鏡を使って1ミリ以下の単位で処置

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(s-syaka1@yomiuri.com)へお願いします。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください